

大規模災害想定地域におけるDMAT実動訓練に参加した看護学生の体験 第2報 学生の学びに関する記述の分析

著者	中西 唯公, 浦川 加代子, 村端 真由美, 種田 ゆかり, 吉田 和枝, 西出 りつ子
雑誌名	三重看護学誌
巻	15
号	1
ページ	55-59
発行年	2013-03-15
その他のタイトル	Experiences of Nursing Students with DMAT Field Training in Potential Large-Scale Disaster Areas : An Analysis of Students Personal Descriptions of Their Learning
URL	http://hdl.handle.net/10076/12444

大規模災害想定地域における DMAT 実動訓練に参加した看護学生の体験 〈第 2 報〉 学生の学びに関する記述の分析

中西 唯公, 浦川加代子, 村端真由美
種田ゆかり, 吉田 和枝, 西出りつ子

**Experiences of Nursing Students with DMAT Field Training
in Potential Large-Scale Disaster Areas
: An Analysis of Students' Personal Descriptions of Their Learning**

**Yuko NAKANISHI, Kayoko URAKAWA, Mayumi MURABATA
Yukari TANEDA, Kazue YOSHIDA and Ritsuko NISHIDE**

Key Words: Large-Scale Disasters, DMAT Field Training, Nursing Students, Experiences, Learning

I. はじめに

第 1 報で述べたように, 2012 年 1 月に大規模災害の想定される三重県で中部ブロック DMAT (Disaster Medical Assistance Team: 災害派遣医療チーム) 実動訓練 (以下, 実動訓練) が行われ, 本学科の看護学生が傷病者役として参加した。

学生は, 出身地や現在の居住地等の関係から大震災等の被災経験のない者が多く, 今回, そのような背景をもつ学生が被災者の立場で訓練に参加することは貴重な体験であり, 学びも多いと考えられた。一方, これまでの研究からも学生の災害への関心が低く, ボランティア活動や訓練参加の行動に結びついていない背景には, 自分の生活に影響がないことでの危機感の薄さがあり, 漠然とした危機感は抱いているが災害に備えて何ができるかまで考えていない現状があることが指摘されている (原田ら 2012)。

また, 本学では 2009 年度入学生から「災害看護学」が必修科目となり, 2012 年度後期に 4 年生を対象に初めて開講することとなった。

近年の地震や津波の想定を受け, 看護基礎教育の中でも災害看護の教育は重要視されてきている (小原ら 2007)。そして, 災害看護を学ぶにあたって教育上の工夫の中に, 「臨場感を持たせることが効果的である」という意見が多数上がっている (長澤ら 2007)。

実際に, 災害看護の教育内容として学生にシミュレートさせる机上訓練や災害訓練に学生を参加させる等, 様々な工夫をした教育方法とその効果が報告され, 体験を通じた学びを生かす教育のあり方が模索されている。

II. 目的

大規模災害想定地域における DMAT 実動訓練に傷病者役として参加した看護学生がとらえた学びを明らかにし, 災害看護学の教育の方向性を検討することを研究目的とした。

III. 研究方法

1. 対象

2012 年 1 月 22 日の実動訓練に参加した看護学生 (2 年生～4 年生) 48 名 (内訳は第 1 報の通り)

2. 方法

1) 調査方法

無記名による自記式質問紙調査を訓練直後に実施した。質問内容は, 最も心に残った場面と感じたことや学んだこととし, 参加学生に質問紙を配布し, 回収箱にて回収を行った。

調査期間は実働訓練直後から2012年2月3日までとした。

2) 分析方法

回収された質問紙に記述された内容から教員が学びと判断した記述を質的帰納的に分類した。

3) 倫理的配慮

調査前に、参加の自由と記述内容により不利益を被ることはないこと等を口頭と文書で説明し、回収をもって調査協力の同意を得たと判断した。なお、三重大学医学系研究科倫理審査委員会から公表・発表についての承認を得た。

IV. 結果

回収できた27名(回収率:56.3%)を分析対象とした。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉で示す。

分析の結果、44のコード、13のサブカテゴリーから【医療者の対応】【役割】【連携】【実際の救助】【体験】の5つのカテゴリーに分類した(表1)。

1. 【実際の救助】と【医療者の対応】

実働訓練に参加した学生は、【実際の救助】の場面の体験を通して、災害現場だからこそ患者(傷病者)を安心させるような【医療者の対応】が重要であることを学んでいた(図1)。

【実際の救助】では、〈DMATの実際〉〈災害救助の実際〉〈トリアージ〉の3つのサブカテゴリーが抽

表1. カテゴリー一覧

カテゴリー	サブカテゴリー
医療者の対応 (8)	医療者の行動 (3)
	患者への配慮 (3)
	医療者の対応 (2)
役割 (11)	看護師の役割 (6)
	医療者以外の役割 (5)
連携 (9)	多職種が存在 (4)
	病院との連携 (3)
	チームワーク (2)
実際の救助 (11)	DMATの実際 (4)
	災害救助の実際 (4)
	トリアージ (3)
体験 (6)	大切なこと (3)
	体験から知る (3)

結果1. 【実際の救助】【医療者の対応】

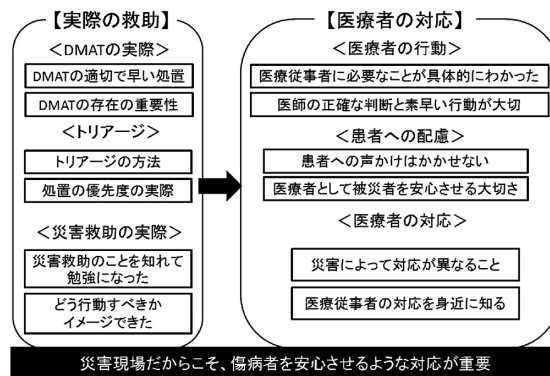


図1. 【実際の救助】【医療者の対応】

出された。実際に学生が傷病者役となり、〈トリアージ〉を受けたことでトリアージの方法を知ったり、他のトリアージカラーの傷病者役と自らの対応を比べたりすることで、災害現場における処置の優先度等の実際を学んでいた。学生は目の前で〈DMATの実際〉を見ることができ、適切で早い処置を行う姿に、災害現場での役割の重要性に気づいていた。DMATやトリアージを自らが体験することで、〈災害救助の実際〉を知るだけでなく、それらをふまえ、災害時に医療職としてどのように行動すべきかをイメージすることにもつながっていた。

【医療者の対応】では、〈医療者の行動〉〈患者への配慮〉〈医療者の対応〉の3つのサブカテゴリーが抽出された。災害現場での正確な判断や素早い動きなどの〈医療者の行動〉だけでなく、患者(傷病者)への声かけ等を傷病者の立場で体験し、医療者として被災者を安心させる〈患者への配慮〉の大切さを学んでいた。また、自らが処置などの〈医療者の対応〉を受けたことで、そういった場面での医療者の対応のあり方を身近で知ることができ、災害の種類によって医療者の対応が異なることまで自らの学びを深めていた。

2. 【連携】と【役割】

複数のDMATチームや職種の活動場面を目の当たりにしたことで、【連携】のあり方についてそれぞれの職種の【役割】の重要性と関連させながら学んでいた(図2)。

【連携】では、〈多職種が存在〉〈病院との連携〉〈チームワーク〉の3つのカテゴリーが抽出された。学生は、看護師や医師だけでなく、活動している〈多職種が存在〉を知り、医療者だけでなく多くの人が関わっていることに気づいていた。また、職種間の連携だけでなく、様々な医療機関からDMATチームが参加していることで〈病院との連携〉や多職種・多機関

結果2.【連携】【役割】

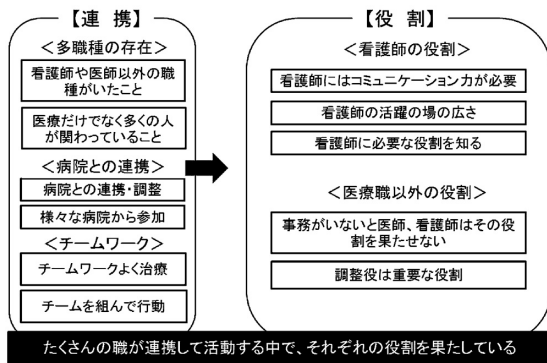


図 2. 【連携】【役割】

のスタッフが〈チームワーク〉を組んで活動していることを学んでいた。

【役割】では、〈看護師の役割〉〈医療者以外の役割〉の 2 つのサブカテゴリーが抽出された。

傷病者に対応する際の看護師のコミュニケーション力の必要性や看護職の活躍の広さなど災害現場における〈看護師の役割〉だけでなく、調整役となった事務職等の重要性に気づき、〈医療者以外の役割〉にも目をむけることができ、それぞれの【役割】について学んでいた。

3. 【体験】

【体験】では、〈大切なこと〉〈体験から知る〉の 2 つのサブカテゴリーが抽出された。訓練に参加するという【体験】を通して、情報共有や、備えておくや力を貸してくれる人が〈大切なこと〉に気づき、訓練を見学することで全体の流れが理解でき、学生が参加することの意味を考え〈体験から知る〉ことの重要性を学んでいた(図 3)。

結果3.【体験】

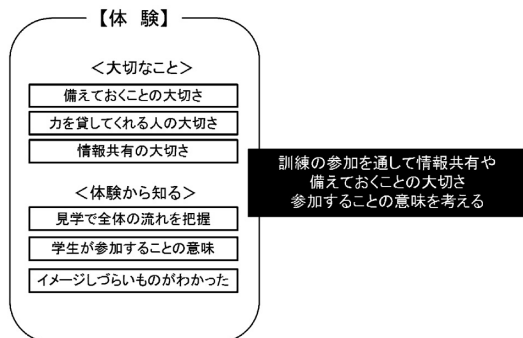


図 3. 【体験】

V. 考 察

1. 実際の救助と医療者の対応

災害現場における急性期の対応は、傷病者の救助及び危険地域から安全な場所への移動と 3 つの T、すなわちトリアージ (triage)、治療 (treatment)、搬送 (transportation) である (新藤 2009)。

訓練において傷病者役となった学生には、傷病者の状況を想定したカードが渡され、トリアージがされた後、それぞれの状態に応じた処置がされた。実際の場面を想定し、トリアージタグが「黒」と設定された傷病者には、心肺蘇生等の積極的な処置は行われずに毛布などによる保温や安置等の対応が行われていた。トリアージに関しては、阪神・淡路大震災以降に標準トリアージタグが開発され、教育訓練の場で広く用いられてきた (石井 2010)。実際に災害看護教育としてそれらを授業内容に取り入れ、模擬患者を用いたラーリー方式の訓練は、トリアージの難しさや知識の必要性について実感する機会となり、学習の動機づけに有効であることが示唆されている (坊田ら 2007)。

しかしながら、学生が傷病者役として実際にトリアージや処置を体験することで、災害時の医療の全体の様子を体験することができ、日常の医療と異なり、優先順位をつけて医療が行われる等、災害時の医療や医療職の実際に動きについて客観的に理解することにつながると考えられた。

また、学生は医療者の素早い判断や行動だけでなく、自らに対応してくれた医療者の姿から、災害発生直後という不安な中での対象への声かけの重要性や安心感を与えるという、医療や看護の原点となるケアのあり方を学んでいた。

こころのケアの基本的な考え方として、心理社会的支援が充実し、基本的な安心感や安全感が回復するにしがってトラウマ症状も減じていく (小原ら 2012) と言われている。亜急性期から傷病者の心のケアを念頭におき、傷病者に対応すること、また、限られた医療資機材の状況で普段の医療が展開できない中で、災害現場だからこそ傷病者を安心させるような関わりの必要性を改めて理解する機会となったと思われる。

2. 連携と役割

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災においても DMAT 380 チーム、1,800 人の隊員が全都道府県から迅速に参集し、活動している (小井土 2011) ことから、災害発生直後には様々な医療職が参集することになり、現場の混乱も予想される。災害時には皆がいらいらし、殺気だった雰囲気となり、救急隊からの

ホットラインさえも通じず、連絡無しに傷病者が救急車で運ばれてくる。この時に、あうんの呼吸での傷病者の受け渡しができたのは救急隊との顔が見える関係があったから（内藤 2008）と平時からの災害時に連携を図れる体制づくりの重要性が述べられている。今回の訓練においても、それぞれの DMAT チームのユニフォームを着用した様々な職種の様子や会場ではホワイトボードによる情報共有を行っている様子を学生は見る事ができ、情報交換や共有のあり方を含めた、災害時の医療の流れチームで連携して活動することを理解できたと考えられる。また、実際に学生自身が傷病者となったことで、身近で、傷病者受け渡しの際の情報交換の様子を体験し、その必要性について学ぶことにつながったと思われた。

また、今回、看護学生として災害看護の場を体験したことで、看護職として平時からも必要であるコミュニケーション力が災害時にはさらに必要であることを傷病者役として感じていた。回復復興へと向かう長い道のりのスタートとも言える災害急性期での看護ニーズは、ケアリングではないか（石井 2012）と言われている。日本国際緊急援助隊医療チームで活動を行った看護師を対象とした経験の記述では、看護師は診療サイトの中を被災者とともに動いていた。これは、限られた時間と資源の中で最大多数の被災者に治療とケアを提供しようと努力しながら、できるだけ被災者とともに存在し関心と気遣いを示そうとするがために動いていたものと解釈できる（太田 2007）と述べられている。これらのように、災害現場では、限られた状況の中で、優先順位を決めて処置をするだけでなく、看護職がコミュニケーションを通じてケアリングを行っており、訓練を通して実際に問診され、ケアされることを体験し、学生自身もその必要性を理解することができたと考えられる。

DMATの目的は、「避け得た災害死」を防ぐために災害発生直後より救命医療を行うことであり、チームは、医師、看護師、業務調整員（医師・看護師以外の

医療職及び事務職員）で構成される（大友 2010、日本 DMAT ホームページ）。業務調整員には、薬剤師、理学療法士、救命救急士、事務職等の職種があたる。業務調整員としては、医療機器、薬剤、食糧をはじめ、情報収集・通信や移動等にかかわる機材、資材を管理し、現地では、情報の収集・集約と発信、記録などの活動を行う（塚口 2011）とされている。すなわち、医師や看護師がトリアージや処置等の対応をスムーズに行うことができるように、資機材の確保から情報の収集・発信などの整備を行っており、平時の情報や物流が機能しない災害時において、重要な役割を果たしている。

災害時の医療では、医師や看護師に注目されがちであるが、実際の訓練の場で業務調整員が情報や場をつなぐ役割をしていることを知り、円滑な災害医療・看護の遂行のために、多くの職種が連携して活動する中で、それぞれの役割を果たすこと、そのためにはチームの一人として看護職はどのような役割を遂行するかについて考えるきっかけとなっていた。

3. 体験の意味

訓練参加を通して、学生は災害現場での医療の実際を学んだだけでなく、情報共有の重要性や自らが災害に備えておくことや力を貸してくれる人の大切さに気づくことができた。

はじめにでも述べたように、たとえ身近で災害が発生したにも関わらず学生の災害への関心は低く、ボランティア活動や訓練参加の行動にむずびついていないことが明らかとなっている。その背景には、漠然とした危機感は抱いているが、自分の生活には影響がないことで危機感の薄いことが要因として考えられる（原田ら 2012）。今回、災害現場を想定した訓練に参加したことで、学生はその臨場感あふれる雰囲気の中で災害時をイメージすることができた。現時点では、学生であり、医療者として活動できるわけではないが、自助として備えや共助としての助け合い等、平時の防災につ



写真1



写真2

いても、今自分ができることは何かについて考えを深めることになったと思われた。

また、「イメージしづらいものがわかった」という学生の記述からも、大規模な災害を体験していない学生にとっては、机上の学習だけでは、現場の様子や医療のイメージが難しく、実際を見ることの意義や学生として参加することの必要性を学生自身も感じ、改めて災害看護学の教育内容として、視覚的な観点からの教育の展開を組み入れる必要があると考えられる。

以上のことから、今回、看護学生が感じた視点、つまり、情報交換・共有を行いながら、災害現場の状況を協力して把握する必要性、被災者の立場に寄り添いながら看護職としてどのように行動するべきか等を災害看護学の教育の中に盛り込んでいく必要がある。

「普段体験しないことを自ら見た、聞いた、感じた、考えた」ことが学生の心に残っていた。これまでの研究においても、グループワークや演習（救急処置、避難所生活の模擬援助、トリアージ演習など）を通じての、学生自身の体験による気づきが教育効果につながっていることも示されている（長澤ら 2007）。

よって、被災の疑似体験や避難所における看護などの自らの体や五感を活用した演習が学生の心に響きやすく、学びとして残るものと考え、災害看護学の教育内容の検討を行う際には、そのような視点を組み込んでいく必要がある。

VI. 結論

DMAT 実働訓練に傷病者役として参加した看護学生への調査の分析により以下のことが明らかとなった。

実際の救助の場面での医療職の対応を身近に体験することで、災害現場における傷病者への配慮や看護職やそれぞれの職種の役割、また多職種と連携しながらチームとして活動することの大切さを学ぶことができた。これらのことから、看護学生が感じた視点である災害現場の状況を協力して把握する必要性、被災者の

立場に寄り添いながら看護職としてどのように行動するべきか等を災害看護学の教育の中に盛り込んでいく必要がある。

文献

- 坊田香織（2007）：看護学生の災害トリアージ訓練の結果からみた教育的課題，日本災害看護学会誌 Vol.9. no 2, 5-39
- 原田秀子，田中周平，張替直美（2012）：災害訓練への参加を通しての看護学生の災害看護についての学び，山口県立大学学術情報 第 5 号（看護栄養学部紀要 通巻第 5 号），37-46
- 石井美恵子（2010）：災害医療・看護の課題－経験を教訓に，Nursing Today Vol.25 no.4, 21-25
- 小井土雄一（2011）：東日本大震災における DMAT 活動と今後の研究の方向性，J. Natl. Inst. Public Health, 60（6）495-501
- 長澤利枝，松尾ひとみ，深江久代（2007）：看護系大学及び短期大学における災害看護教育の実態，静岡県立大学短期大学部看護学科 特別研究（学部長権限）報告書
- 内藤万砂文（2008）：災害における医療の役割，J. Natl. Inst. Public Health, 57（3），206-211
- 小原真理子，酒井明子（2012）：災害看護 心得ておきたい基本的な知識，南山堂
- 太田宗太（2007）：災害急性期の医療援助における精神保健－被災者および救援者の心理反応－，災害医療，EMERGENCY CARE 2007 新春増刊，217-227
- 大友康裕（2010）：DMAT の基礎知識，DMAT 完全マニュアル，EMERGENCY CARE 2010 新春増刊 10-27
- 新藤正輝（2009）：災害医学，南山堂
- 塚口真穂登（2011）：災害と薬剤師 DMAT 活動における調整役と薬剤師の役割，病薬アワー（企画協力：社団法人日本病院薬剤師会）2011 年 8 月 29 日放送分
<http://medical.radionikkei.jp/Jshp/final/pdf/110829.pdf>
- 日本 DMAT ホームページ（取得：2012 年 12 月 1 日）
<http://www.dmat.jp/index.html>

キーワード：大規模災害，DMAT 実働訓練，看護学生，体験，学び